
昼と夜と異世界と.....

鴉～トキ～

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

昼と夜と異世界と……

【Nコード】

N6679T

【作者名】

鴉トキ

【あらすじ】

三年と少し前、謎が多く残る事件があった。とある家族が住んでいた家“だけ”が突然崩れたのだ。「ガス爆発が起きた様です。」出張先でそう言われた一家の主である「功」は、急いで現場に駆けつけた。家は全壊していたが、焼けた後はなく、近隣住民は「いつ崩れたのか全く分からなかった。」と首を傾げた。そして、その家に住んでいた双子の兄「修夜」と弟「真昼」は無傷で意識がない状態で見つかり、功の看病の元三日で意識を取り戻したが、意識を失う前の記憶が無かった。さらに、その家にいたはずの母親「陽菜」

の姿がその日から消えた。とある事情から、母親がいなくなったことを警察に言わなかった三人は、自力で捜し出すことを決意した。

そして現在、一浪を経て大学に入ったため、二十一歳で二年生になった修夜と真昼は、それなりに充実した日々を送っていた。そんなある日、友人達と共に父、功の誕生日を祝っていた修夜と真昼は、あの日の光景と酷似した出来事に遭い記憶を取り戻すことができた。しかしあの日の母と同じように、今度はその場にいた全員が暗闇の中へ吸い込まれてしまった。

その先に待つものとは……？

様々な思いと思惑が交錯する、異世界×ファンタジー、始まります。

ブローグー始まりは二年前（前書き）

不定期更新です。

ブローグは早めに上げようと思いますが、それ以降は驚くほど遅い更新になるかもしれませんのでご了承ください。
コメント、メッセージなどありましたらお気軽にどうぞ。

プロローグ―始まりは二年前―

二年と少し前。オレの……オレ達の母親は、突然いなくなった。

その日、双子の弟である真昼とオレは大学受験を翌日に控え、中々眠ることが出来ないでいた。二人で問題を出し合いながら、やっと眠りに沈みかけた時だった。

突然轟音と共に、下から突き上げる様な強烈な揺れが起きた。

オレと真昼は飛び起きてお互いの無事を確認すると、母さんがいるはずの居間へと急いだ。

今思えば、夢を見ていたのかとも思う。轟音がした直後なのに周りが静かすぎた気がする。普通、あんな爆音がしたら周りの民家のおばさん達が騒いでいるはずだ。それに、下から来た衝撃。体が少し浮くぐらいの衝撃があつたのだから道具や荷物が散乱していてもおかしくはないのに、部屋の中や廊下はそんな衝撃があつたとは思えないほどいつも通りだった。どこからが夢で、どこまでが夢か分からない曖昧な記憶。その記憶は居間に続くドアに手を掛けたところで途切れている。

次に目覚めたのは、病院のベッドの上だった。

病室はどうやら二人用らしく、左隣のベッドには真昼が寝ており、間に置いた椅子には親父が座っていた。オレが身じろぎすると、親父が物凄い勢いでオレの顔をのぞき込んできたのを覚えている。その顔は竄^{やっ}れていて、髭も二、三日剃っていない様だった。

その後、ちよつと興奮気味に「大丈夫なのか？」的なことを聞いてくる親父を落ち着かせながら話を聞くと、どうやらオレと真昼は三日前に、家で起きたガス爆発に巻き込まれ意識不明になっていたそうだ。話を聞いていると、真昼も目を覚ました。二人とも奇跡的に外傷は無く、意識だけが戻らない状態だったらしい。

出張先で連絡を受けた親父は一度家の様子を見てからすぐに病院に駆けつけ、それからはずっとオレ達の様子を見守っていたようで、

オレ達の意識が戻って暫く話すと安心したのか電池が切れた様に病室の椅子で眠ってしまった。

オレと真昼は簡単な検査と医師の診断を受けた後、目を覚ました親父と一緒に昼食を取った。三日も意識不明だったのに、「短時間で簡単に検査が済んで良かった。」と言った真昼に、親父が「お前達の意識が無い時に、一度精密検査したんだが……異常が全く見つからなかったからだろう。」と答えているのを聞いてオレも納得した。

昼食を食べ終わって暫く経った時、真昼が親父に「そっいや、かあさんは？」と聞いた。

「それが、お前達が意識を失った日。つまり、家が爆発したらしい日から、姿が見えないんだ。」

少し言いくそくに、親父はそう言った。

「焼け跡からは……？」

変な言い回しが気になって、オレは親父に質問してみたが、その答えは「崩壊した家の下から何かが出てきたというのは聞いていない。」だった。

まさか、とは思う。そんなことができるような人では決してない。優しくてのんびり屋な、あの母さんが……。

顔に？ を浮かべている真昼は、この可能性に気付いてはいない様だ。良くも悪くも、純粹無垢な弟とは違い、オレの顔は陰しくなっていた。

親父はオレの方を向いて、オレの名を呼んだ。

「修夜。」

「……なんだよ。」

「ちよつと、耳を貸せ……。」

そう言って内緒話をする様に体を乗り出してきた親父に耳を貸すと、親父は真昼に聞こえないくらいの小さな声で話し出した。

その内容をまとめると、おかしいことが沢山ありすぎるといった。とだった。

一つ 家はガス爆発で吹っ飛んだと警察から聞いたが、火が出た様子がなかった。

二つ 近隣住民に爆発音を聞いた人がいない。

三つ 明らかに、崩壊した家の残骸の量が少ない。

四つ 家はバラバラに砕け散っていたのに、近隣の家には傷一つ無かった。

加えてもつと細かなところで疑問に思うことや、オレ達が無傷だったのも含め、ほんとに沢山の謎が出てきた。

「母さんは、違う。もしかしたら、これをやった犯人に捕まっているのかもしれない。この話を警察にすると、お前が“もしかして”と、思った方向で捜査するに決まっている。だから、警察には母さんのことを話していない。」

親父はここまで話すと顔を離し、オレの頭をグリグリと乱暴に撫でた。

「気にするな。父さんも、最初はそう思った。もちろんすぐに否定したが、それは否定する材料があったからだ。望まない結果を無条件に無視するのは、真実から目を背けるのと一緒にのことだ。条件が違えば、その線も視野に入れただろう……。」

それから親父は優しく微笑んで、「なに、心配するな。」と言った。

オレ達は次の日には退院し、近くのアパートに引っ越した。遠く離れるべきか、近くで母さんが帰ってくるのを待つかで悩んでいた様だが、真昼が「かあさんが帰ってきた時、すぐ分かるように、近くがいい。」と言ったので結局そうなった。

オレと真昼は受験どころでは無く浪人生となり、親父は母さんを捜すために仕事を辞めた。代わりに働きに出ようとしたオレと真昼を止めたのは親父だった。あまり興味が無く知らなかったのだが、親父はそれなりに有名な会社の重役をしていたらしい。そんな親父に「お金には困らないから、お前達は大学に行った方がいい」と言われたので、オレと真昼は素直にそれに従った。

そうしてオレと真昼は大学再受験の為に勉強をし、親父は母さんの手がかりを探し続けた。オレは勉強の間に、鍛錬をして体を鍛えながら、料理を始めた。真昼は何故かオカルト系の本を買い漁り、勉強と家事をこなす以外の時はその本を読んで過ごす様になった。いつだったか、親父が珍しく弱気になって「父さんは間違っていたんだろうか。やはり警察に探してもらった方が良かったのかもしれない。」と言っていたのを聞いて、真昼と二人で励ましたことがあった。

実は、警察に言わなかった理由がもう一つある。

俺たちの母親は俗に言う駆け落ちというやつで親父と一緒にになったのだが、問題はその実家で、居場所がばれると命が危ないらしい。オレ自身はそんな危険な目には遭っていないし、真昼もそうだ。どうやら親父はその実家に顔が割れていないらしく、母さんは普段からあまり外に出ないものだから、見つかつていないだけなんだろうと思っているが、母さんのことを話せばまず間違いなく母さんの顔が全国ニュースで流されることになるので、やはり自分たちの力で見つけ出すしかないということになったのだ。

それを再確認する様に、「正しいかどうかは分からないが、オレも真昼もそれが正しい選択だったと思う。」と言うと、いくらか楽になった様だった。

そんなこんなで一年が過ぎオレと真昼は近くの同じ大学に受かった。それなりに友達も出来、テニスのサークルにも参加しながら、オレは鍛錬を続け剣術を始めた。真昼もオレと同じサークルに入った。真昼は一年間引きこもっていたとは思えない社交性を身につけていたが、家では相変わらず家事以外の時間は本を読んで過ごしていた。

一方、親父は母さんを捜す内に身につけたことを元に探偵を始め、これが難事件も難なく解決する凄腕事務所になった。依頼人の捜し人はすぐに見つかるのに対し、オレ達の母親の手がかりは欠片も見つからなかった。

それでも諦めることはせず、けれどゆっくりと落ち着きを取り戻してきたオレ達の生活は、ちよつとした問題を挟み、さらに一年をかけてやっと安定することになるのだった。

プロローグ 2 友達の輪

「ペケー！ マルー！ 今日のサークルの飲み会には参加するの！？」

急に講義が無くなって暇を持てあまし、学食で時間を潰そうと移動していたオレ達の後ろから、肩を叩きながら一人の女子が話しかけてきた。女子の名前は「秋月 優羽」。同じサークルの二年生だ。ちなみに「ペケ」というのはオレのあだ名で、「マル」というのは真昼のあだ名だ。

あだ名の由来は実に単純で、オレの左目尻には小さなバツテンの傷があるので「ペケ」。真昼は小さなまん丸の眼鏡を掛けているので「マル」。どうやらオレ達が双子だと言ったこともこのあだ名を決めるのを手伝ったとか……xとか。

「いくよー。ゆっちーは行くのー？」

どことなく母さんの話し方に似ている間延びした返事をした真昼に、優羽は笑顔を向ける。

「私が行かないわけじゃないじゃん！ ペケは？ マルが来るんだから来るよね？」

「ああ、今夜は師匠に用事があって、剣術の鍛錬が中止になったかな。」

「おお？ やったー！ じゃあじゃあ、私が隣でお酌してあげるねっ。ペケとマルの間に座るから、その席予約でよろしくっ。」

優羽は元気よく言うと、返事も聞かずに手を大きく振りながら走り去っていった。

「まるで小さな台風だな。」

「だねー。」

まだ四限目だということもあり、いつもは戦場の様な学食はそのなりを潜めていた。オレと真昼は手近な席に陣取り、しばらく他愛ない話をして時間を潰した。

話題が一区切りすると、真昼は鞆から本を取り出した。流石に外なのでオカルト系の本ではなかった。どうやら最近の流行だと友達から渡された物らしい。

真昼が本を読むのをボーっとながめていると、ドツと人が押し寄せて来た。どうやら四限目が終了したようだ。

「騒がしいし、いつもどこ行くか？」

オレがそう訪ねると、真昼は頷いて本をしまった。二人して席を立ち上がり、人の流れに沿って人口密度が低い方へと進んでいく。さして苦勞すること無く人混みを抜け出したオレと真昼は、一番古い一番学舎と呼ばれる建物に向かう。もう使われていないその建物は大学内の端っこにあるので、滅多に人が通ることはない。鬱蒼と茂る木々の間から差し込む木漏れ日に目を細めながら暫く進むと、目的の建物に到着する。その建物の横に、ちよっとした隙間があるのだが、そこをすり抜け裏側に出ると目の前が一気に開ける。表から見ただけでは分からないが、鬱蒼と茂る木々がそこだけ何かに切り取られたかのようになっており、ポツカリとした空間があるのだ。昼間に来ると太陽がちょうど上からその空間を照らすので、温かく昼寝にも最高のポイントだと言えるだろう。端っこに位置するので移動に時間が掛かり、昼休みの前か後の講義がない時にしか来れないが、オレはここを気に入っていた。

「ほれ、今日の分な。」

「ありがとー。」

オレは太陽に照らされフサフサになったちよっただけ長めの芝に腰を下ろすと、鞆から弁当箱を二つ取り出し一方を真昼へと渡した。

「いただきます。」

「おう。」

今日の弁当はハンバーグにポテトサラダ、鶉のゆで卵に特性のタレを塗った海苔をご飯に二枚挟んだものだ。真昼はこのタレが好きらしく、毎回白いご飯を箸でつづくのを楽しみにしている。オレはそんな真昼の反応を見て楽しんでいるのだが、海苔入りで「わーい

！」と喜んでいる真昼には気付かれていないだろう。

お昼を挟んでいるどちらかの講義が休みの場合、オレ達はここにやってきてのんびりするのが日課になっていた。

「ごちそうさまー、修夜。おいしかったよー。」

「お粗末様。」

真昼はいつも「おいしい。」と言ってくれるが、たまに創作料理に失敗すると「まずいよー。」と言うので、お世辞とかではない素直な感想なのだろう。

「そういえば修夜。父さんの夜ご飯はどうするのー？」

「ん？ 普通に作ってから行こうと思ってたんだが、何かあるのか？」

「いやさー、今日は特別講義で帰るのが遅くなるから、どうするのかなーっと思っただけー。」

「あー……、そういやそうだったな。急いでも遅れそうだし、真昼は先に行つててくれ。」

オレは真昼に答えながら弁当をしまつと、そのまま芝の上に横になった。

「いやー、買い物もあるだろうし、僕も修夜と一緒にに行くことにするー。」

「いいのか？」

「いいよー。ゆっちーにメールしとくねー。」

そんな会話をしながらしばらくのんびりして、オレ達は午後の講義に向かった。講義中に優羽から「席は確保しておくから、急いでくること！」とメールが入った。適当に返信して、電源を切る。オレは講義に手を抜かない方なのだ。

講義が終わってから携帯の電源を入れると、メールが三件来ていた。二つは優羽からのどうでも良い内容だった。最後の一つは親父からで、仕事で晩飯を外で食うことになったという内容だった。

「真昼、親父の晩飯作らなくて良くなったぞ。仕事らしい。」

言いつつオレは携帯を閉じるとポケットに突っ込んだ。

「そかー、じゃあ遅刻しなくて済みそうだねー。」

そう言って真昼は携帯を取り出してポチポチしだした。きっと優羽にメールを送っているのだろう。いつの頃からだったか、二人で用件があるときには真昼が代表で連絡をする様になっていた。それでも優羽はオレにもメールを送ってくるのだが、オレはたまにしか返事をしない。優羽も別に返事を求めているようではないので、このスタイルが定着している。

本日最後の講義が終わって講義室を出ると、廊下で優羽が待っていた。

「やあやあ二人とも、おつかれさん！一緒に行くっ。」

そう言って、オレと真昼の間に突っ込んできて腕を抱える。

「ちよつとー、ゆっちー危ないでしょー。」

オレも真昼もとくに振りほどく様なことはせずそのまま歩き出したが、何歩か歩く度に優羽が腕にぶら下がっては真昼がふらつき、お互いに文句を言いあっていた。

そうしている内に、行きつけの……というほど来ているわけではないが、サークルで集まる時にいつも利用している飲み屋に到着した。

「ほら、いつまでやってる。着いたぞ。」

未だにじゃれ合っていた真昼と優羽に声を掛けると、オレはさっさと店に入った。

「ちよつとペケ！昼間の約束覚えてる！？」

後ろでうるさい優羽をスルーしてオレは店内を見渡す。と同時に店員がやってくる。

「いらっしやいませー。何名様ですか？」

「イエローコートで六名予約した者です！」

「どもー。」

真昼はともかく、オレはオレと店員の間で飛び跳ねながら答えた優羽の頭を押さえつける。

「跳ねるな。」

「うぐ。」

「ごめんねー。」

オレが優羽を大人しくさせると、店員は笑顔で右手にある階段を指した。

「お部屋は二階の竹の間になります。」

「やったー！ ついに、初めての二階っ。楽しみだね、ペケ！ ほん、マルも！」

「ちょっ！？」

「引っ張るなっ……。」

二階と聞いてはしゃぐ優羽に手を引かれ、オレ達は階段を上った。竹の間には既に他の三人メンバーが揃っており、奥の席に横一列で座っていた。

「おっ？ みんな早いねえ。待った？」

さっきまでのテンションがちよつと下がって申し訳なさそうにする優羽に答えたのは、部屋にいた三人の内唯一の男で、同じ二年生「阿部 徹」だ。

「気にするなよ優羽。つか、俺らも今来たことだしさ。」

そう言って男は胸ポケットからタバコを取り出し、火を付けた。灰皿を見ると綺麗なままだったので、今来たばかりというのは本当らしい。

「ありがと、徹っち。」

優羽はフオーンしてくれた徹にお礼を言っつとその向かいの席に着き、オレと真昼を両サイドに座らせた。

「こんばんは、優羽。ペケくんとマルちゃんも。」

席に着くと正面に座った三年生の女子「久茂 千歳」がおっとり挨拶して来た。三年と言っつても、学年が上なだけで、年齢的にはオレと真昼と同一年だ。

「こんばんは、ちーさんっ。杏里もっ。」

「おう。」

「ばんわー。」

オレと真昼は一言返事をし、優羽は徹を挟んだ千歳の反対側にいる二年生の女子「烏丸 杏里」にも挨拶した。杏里は優羽の挨拶にコクリと一つ頷いた。

ヘビースモーカーの徹にマイペースな千歳、寡黙な杏里に小さな台風優羽、それにオレと真昼がこのサークルのメンバーだ。元々は全員が大学の大きなテニスサークルにいたのだが、訳あってそこから訣別し、そして新しく作ったのがこの「イエローコート」だ。

「揃ったことだし、酒頼もうぜ。生のヤツ？」

煙を吐き出しながら徹が言うと、全員がその手を挙げる。

「生6つと、後はテキトーで良いか？」

「オレは枝豆があれば後は適当でいい。」

「僕刺身食べたーい。」

「ポテトっ！ 徹っちポテト頼んでっ！」

「たこわさ。」

「あら、杏里ちゃんわさび苦手じゃなかったかしら？」

「たこわさは、別。」

そんなこんなで徹が注文を通し、暫くしてビールと枝豆が運ばれてきた。全員の手元にビールが行き渡ったのを確認し、優羽がおもむろに立ち上がる。

「それではっ。あの日ことを絆に変えて、これからも変わらぬ友情を！ カンパーイ！」

全員が優羽の後に続き「乾杯！」と言うと、一気にその中身を飲み下す。それはおしとやかな千歳や寡黙な杏里も例外ではない。

これは、ある種の儀式かもしれない。あの日、オレ達が揃ってサークルを辞め、新しい居場所を作った時からの誓いの儀式。特に誰が言っただけでもないが、オレ達の飲み会は毎回こうして始まる。サークルと言うよりは、居心地の良い仲間と共にワイワイ騒ぐのが目的の様なもので、特に決まりやすきことはなく、乾杯が終わるとお互いの近況報告や世間話に興じるのが常だ。

「しっかし、杏里はだいぶ話す様になったな。良い感じじゃねーか

？」

暫く、全員が思い思いに過ごしていると、徹が杏里の頭を撫でながら全員に問いかける様に言った。

「そうねえ。欲を言えば、私たち以外の人とも普通にお話できると良いんだけど……。」

「その内出来る様になるだろ。焦る必要はない。」

千歳の呟きにオレが返事をする、真昼も賛同してくる。

「僕もそう思うな。ゆっくりで良いと思う。」

そしていつの間にか、全員が杏里に寄り添う様に集まり、広い部屋の中で一塊になっていた。

「何か、やっぱり良いねっ。」「何がだ?」「何て言えばいいのかな……この空気?」

「うん……。私も、好き。」「あらあら……。」「なんかさー、家族みたいだね。」

「家族?」「そそー。徹くんと千歳さんの子供が……。」「ぶほっ!?!」「うおっ!」

「ちよっとー! 徹っち汚いよっ!」「ちよ!?! いや、だって……マルてめえ!」

「あらあら、徹は私が相手じゃ嫌なのかしら。」「ええ!?!」「あははー。」「徹、顔、赤い。」

「う、うるせーっ。」「徹、とりあえず拭くの手伝え。」「え? ああ、悪いなペケ。」

「気にすんな……パパ?」「あははー」「ペケもかよ!」「悪い、ついな。」

こうしてじゃれ合える仲間がいるのは、正直助かっている。ここにいる全員が何かしらの悩みを抱え、そしてそれを打ち明け合っている。時にはそのことについて遠慮無く相談し、互いに助け合っている。母さんのことも……。

「……修夜?」

「ん?」

全員で騒いだ後、一息ついてちよつとブーツしていると真昼に声を掛けられた。

「大丈夫？」

「大丈夫だ。少し、母さんのことを考えていた……。」

「そっか。」

「ああ……。」

オレは沈み込みそうな思考から抜け出し、心の中で真昼に感謝しながら立ち上がる。

「どこいくのー？」

いつもの間延びした問いかけに、オレは笑顔を向ける。

「トイレだよ。」

気分を落ち着けて戻ると、真昼が全員に揉みくちやにされていた。それを見て俺は思わず吹き出した。

「修夜。笑ってないで助けてよ！」

本当に、こいつらには助けられる……。オレは笑いを堪えながら近づき、そして躊躇無く真昼を襲う側に混じるのだった。

ブローグ〜誕生パーティー〜

「あー、頭痛ーい……。」

「同感ー。」

昼時にはまだ早い閑散としたカフェで、真昼と優羽はテーブルに突っ伏していた。オレはそんな二人を眺めながら、コーヒーに口を付ける。

「美味しいな……。」

ここはオレのお気に入りの店で、コーヒーを飲むならここだと決めている。そんなオレの呟きを聞きつけ、優羽が顔だけをこちらに向ける。

「なーにが、うまいな……っよ！ ペケの裏切り者っ。」

全く似ていないオレの声真似をしながら、優羽が毒気付いた。あまり大きくない声ではあったが、それでも頭に響いたらしく、隣にいた真昼がうめき声を上げる。

「ゆっちー……。声、抑えてー……。」

「ご、ごめん。」

二日酔いの二人を尻目に、オレはコーヒーを楽しむ。この二人が復活するのは一体いつになることか……。

「うーっす。……って何だ？ だらしねえな。」

そこへ徹がやってきた。真昼と優羽はそんな徹にヒラヒラと元氣なさそうに手を振って答えた。

席に着くなりタバコを取り出して火を付ける徹を見て、オレはそつと灰皿を徹の前にやる。

「お？ サンキュー、ペケ。」

「気にするな。」

そして暫く無言の中、オレはコーヒーを、徹はタバコを楽しむ。
「こんにちわ。って、あら……皆早いわねえ。待たせちゃった？」

声に振り向くと、杏里を連れて千歳がにっこりと笑っていた。

「うーっす。別に気にしなくて良いぞ。」

「おう。早いというか、オレとこの二人は徹夜してそのままだ。」

千歳と杏里が席に着き、そのまま会話が続く。

「あらあら、ダメじゃないペケくん。ちゃんと見張ってないと。」

「いや、これでも止めたんだぞ？ それに、オレはこうして二人を無事にここまで連れてきた。」

「ったく。酒は飲んでも飲まれるなって言葉もあるのによあ。」

「まったくだな。」

「とりあえず、二人は復活までほっとくとして、飯食おうぜ。腹減ったー。」

「適当にサンドイッチ頼んでつまむか？」

「私はそれでもいいけど……、杏里と徹はどうするの？」

「あんまり、お腹、空いてない。」

「俺はランチ頼むわ。」

「じゃあ、注文するわね。」

「……サンドイッチを。」

「二人分追加……。」

千歳が注文をしようと店員を呼ぶ寸前、死にかけの声で優羽と真昼が声を上げた。オレ達は顔を見合わせて笑うと、店員を呼び注文を済ませた。

サンドイッチが運ばれてくるまで、杏里が優しく真昼の頭を撫でていたのが微笑ましかった。

「これなんてどうかしら？ 功さんにピッタリだと思うけれど……。」

「そう言っただけで千歳が手に取ったのは、薄い水色の生地に淡いピンクや緑の水玉模様の明るいネクタイだった。」

「良いと思うよー。千歳さんがネクタイなら、僕はタイプピンでも買おうかなー。」

二日酔いの二人が復活したのは午後三時頃だった。それからオレ達は揃って本日の目的である買い物に来ていた。

「ペケ、この鞆とかどうよ？」

「良いと思うが……ちょっと高くないか？」

「そこでよ！ 二人からってことで半分ずつ出せば良いと思わねーか？」

「なるほど。オレもちょうど何にしようか迷っていたし、そうするか。」

こうしてオレと徹は鞆を、千歳はネクタイ、真昼はタイピンを購入した。四人で会計を済ませると、道を挟んで反対側にあるスーパーへと向かう。そこで色々と買い込んだ優羽と杏里と合流し、オレ達はワイワイ話しながら親父がやっている探偵事務所の二階へ辿り着いた。

「ペケ、イッチーいつ頃帰ってくるんだっけっ？」

到着して早々に前々から準備していた物で部屋を飾り付けていると調理場から優羽が顔を覗かせた。ちなみに、イッチーと言うのはオレと真昼の父親のことで、本名は功と言う。

「七時過ぎだ。」

「分かった！」

優羽はそれだけ確認すると、再び調理場へ戻っていった。

今現在部屋の飾り付けをしているのは男三人に千歳を入れた四人だ。優羽と杏里は調理場で料理をしている。意外なことに、優羽と杏里は物凄く料理がうまい。オレも結構腕を上げた方だが、二人には勝てる気がしない。一方千歳も料理が出来ないわけではないが、手先の器用さを飾り付けに生かすことにした。何故なら、オレ達男衆にはセンスが無いからだ。そんなこんなで適材適所、部屋を飾り付け、完成した料理を運び、準備は整った。後は本日の主役を待つだけとなった。

「功さん帰ってきたわよ！」

「タイミングばっちりだねー。」

窓から外を見ていた千歳が小声で報告し、オレ達はクラッカーを手にはスタンバイする。聞き耳を立て、親父が二階へ昇る音に集中する。そして、オレ達が待ちかまえているとも知らず、親父がその扉を開いた。

「イツチー！ 誕生日おめでとう！！」

瞬間、優羽が叫ぶと同時に、オレ達の手に持っていたクラッカーが、一斉に色とりどりの紐や紙をまき散らしながら大きな音を立てた。

「ぬあ！？ え……何だ何だ？」

完全な不意打ちが成功したことで、優羽は大はしゃぎだ。オレ達も笑顔を浮かべ、親父だけが置いてけぼりを喰らっていた。

「功さん。今日は功さんの誕生日ですよ。これ、わたしからのプレゼントです。」

「お……おお、ありがとう。」

未だ戸惑っている親父に真っ先にプレゼントを渡したのは千歳だ。そしてそれに続いて真昼がプレゼントを渡し、その後にオレと徹が鞆を渡した。

「私と杏里からは豪華な料理をプレゼントだよっ！」

「こりや……また、ほんとに豪華だね。」

やっと事態が飲み込めてきたのか、親父はいつもの感じをだいぶ取り戻していた。そしてテーブルの上に並べられた料理に驚いている様だった。

テーブルの上には和洋折衷、色んな料理が並んでいた。中でも一番目立つのは、やはり中心にある三段もあるケーキだろう。

「ほんとに嬉しいよ。ありがとう皆。」

そうして親父は改めてオレ達に向き直って嬉しそうに微笑んだ。

「じゃあ始めようぜ。今年は全員成人したから飲み物はアルコールになってるけど、いいよな功さん？」

「ああ、かまわないよ。」

「いよっし！ それでは、功っちの誕生日を祝って！ カンパーイ！」

優羽の音頭に合わせて皆で「乾杯」をして、誕生パーティーは始まった。

親父を混ぜてこのメンバーで飲むのは初めてのことで、優羽と真昼は二日酔いも忘れてはしゃぎ、飲みまくっていた。オレはそんな二人の様子に、またオレがおもり役か、とため息をついた。

深夜一時。

案の定、オレは一人タオルケットを潰れた連中に掛けて回っていた。親父や真昼、それに徹は床のカーペットに放置して、その上にタオルケットだけ被せてやる。女子はソファに並べて寝かせ、そっとタオルケットを掛けた。

オレは散らかった空き缶やお菓子の袋などをざっと片付けると、部屋の隅でタオルケットにくるまった。

「……？」

さっそく眠りに落ちかけていたオレは、かすかな物音に気がつき身を起こす。

「あ、ごめん。起こしちゃった？」

部屋の中をこっそり移動していたのは真昼だった。

「いや、まだ眠っていなかったから気にするな。トイレか？」

「うん。」

それだけ言葉を交わすと、真昼はトイレへと向かって行った。オレは真昼を見送ると、再びタオルケットにくるまり直した。昼間は温かいと言うより少し暑くなってきたこの時期でも、夜は冷える。最後にもう一度、顔だけを起こし全員にきちんとタオルケットが掛かっているのを確認して、オレは瞳を閉じたのだった。

プロローグ4 誘（いざな）いの目

「うわあああああああ！？」

突然の大声に、オレは飛び起きた。素早く辺りを見回すと、優羽と杏里それに千歳の三人はソファアーの上で身を竦めていた。その前には三人を守る様に親父と徹がいた……。

「真昼……？」

突然のことに上手く思考が働かないオレは、唯一この部屋に姿が見えない己の分身である真昼を探してキョロキョロしていた。その時、ゾクリと全身に悪寒が走った。何か、似た様な感覚を何処かで……。

「しゅーやあああああああ！！」

「待て修夜！」

せつば詰まった様な叫び声は真昼のものだった。オレは本能に近い感覚で反応し、親父の声を無視してドアをぶち破る様にして声のした方へと飛び出した。

「真昼！ どこだ！？」

「しゅーや！！ 父さん！！！」

いつもの間延びした声ではなく緊迫した真昼の叫び声は、一階から聞こえてきていた。

「トイレか！？」

やっと覚醒してきた頭で、眠りにつく前のことを思い出した。心地よいまどろみの中にいたために時間感覚も曖昧だ。

「しゅー……っ……！！！」

嫌な予感がしたオレは、階段を一気にすっ飛ばして飛び降りる。

「真昼！ なっ……！！？」

そして転がり出た廊下の先。そこには、細長く黒い無数の腕に絡みつかれている真昼がいた。

「修夜！ 待てというのが聞こえないのか……？」

親父が追いついて、オレと同じものを見た。その後ろには徹と優羽、杏里と千歳が続いていた。

「……しゅう、や！」

「う、うおおおおおおお！！！」

真昼の絞り出す様な声にハッと我に返ったオレは、無我夢中でその黒い腕に向かっていった。親父がオレの腕を掴んだ様な気がしたが、オレはそれを振り払い、真昼を捉えていた黒い腕に蹴りを放った。

グニッと、嫌な感触がした。オレに蹴られた黒い腕はのたうち回り、他の数本の黒い腕がこちらに向かってきた。

「つく！ このっ、おりや！ つ！？」

何本かは蹴り飛ばしたりたたき落したりすることができたが、本数が多く捌ききることはできなかった。黒い腕に足を掴まれ、その細腕からは考えられない勢いで、オレは空中に放り投げられた。

「ぐあつ！ くそっ！」

事務所の机をなぎ倒しながら吹っ飛ばされたオレは、それでも直ぐに立ち上がった。吹き飛ばされた先に、いつもは壁に飾られている模造刀が落ちていた。オレはそれを引っ掴むと、再び黒い腕に突っ込み、その刀を振るった。

肉を潰し、骨を砕く様な感触が、力を通して伝わってくる。刃が付いていないため、打撃にしかない刀を振るいながら、オレは焦っていた。

だつてこれは……。この黒い腕は……。

「せりや！ 修夜！ 気を抜くな！ 集中しろ！」

いつの間にか眼前に迫っていた黒い腕を叩きとしたのは親父だった。

「ふん！ 容赦するな。やられるぞ！」

そしてたたき落とした黒い腕に、トドメとばかりにかかとを落とす。鈍く不快な音を立てて黒い腕は潰れ、勢いを無くして腕が伸びてきている方向へと引っ込んでいった。それが鍵になったのか、そ

の他の黒い腕がバラバラに動き出した。真昼はその隙について脱出し、こちらへと駆け寄ってきた。

「修夜……。ア、アレってさ……。」

真昼は震える手でオレの服の裾を握り、じっと蠢く黒い腕を見ながら呟いた。

「アレは、母さんを連れて行ったヤツだ……。」

親父が驚いた顔をしたのは一瞬で、表情を引き締めると後ろからオレと真昼の肩を抱いてそっと耳打する。

「何はともあれ、今が逃げるチャンスだ。下がるぞ。」

「何で！？ アレは手がかりだよ！ 黙って下がれって言うの！？」

「真昼。落ち着け。良いから今は親父の言うとおりにしよう。」

洪る真昼の肩をオレと親父が両サイドからそっと掴んで、ゆっくりと後退していく。黒い腕も同じように、ゆっくりと後退していき、やがて一カ所で黒い点になった。

「何だよ、アレ。」

階段の所まで下がると、徹が話しかけてきた。

「分かん。けど、思い出したことがある。アレは……。アレが、オレ達の母さんを連れて行った。」

「僕も思い出したよ。あの日、居間に続くドアを開けた時に見た。」

「あさんがアレに捕まって、家具とかも巻き込みながら黒い穴に吸い込まれていくのを見た……。」

「マジかよ……。有り得ないだろ。ハハハ……。」

とても信じられるようなことではないが、実際に目の前で真昼が連れ去られようとしたところを見たばかりの徹は、今聞いた話を笑い飛ばそうとして失敗した。

「と、とりあえず安全なところに行きたいなつ。いつまでもアレが見えるところにいると危険だと思うしさつ。」

少し震える声で話す優羽に全員が頷いた、その時だった。

「ねえ……。アレ、まずくないかしら。」

最初に異変に気付いたのは千歳だった。千歳の言葉に振り返ると、

小さな黒い点だったものが、背後に白く巨大な壁の様なものを展開していた。

「おいおい。何しようって言うんだよ……。」

「まずいな。皆、ゆっくり下がろう。」

親父の言葉に頷き、最後尾の杏里と千歳が動いたと同時に、黒い点が白い壁に張り付き、一つの巨大な眼が描かれた。

「ひっ！」

それを見た優羽が悲鳴を上げそうになるのを、徹が口を塞いで防いだ。

吸い込まれそうなほど真つ黒な瞳がギョロギョロと蠢き、辺りを窺う様に白い壁がゆっくりとこちらへ近づいてくる。

「あまり急かしたくはないが、急げ……。」

「っ……。」

「どうした？」

突然、動きが止まった後方を振り向いたオレは見た。ゆっくりと登っていた階段の、その向こう側の壁に、同じような眼の絵が描かれているのを……。

「親父。挟まれたぞ。」

「何だつて？ くそ、どうすれば……。」

前方の眼を注視していた親父は振り向いて後方の眼を確認すると、考え込んでしまった。ジッと、ゆっくり近づいてくる眼を見つめていた親父はふと何かに気付いた様に頷いて、オレに顔を寄せてきた。

「さっきから思っていたんだが、ヤツらはこちがらが見えているのか？」

「……は？」

「さっきから下のヤツは、ギョロギョロしているばかりでこちらを注視しないじゃないか。もしかしたら、他の何かで父さん達の居場所の特定をしている、とは考えられないか？」

「なるほど、こうして話していても全く反応しないし……音でもなさそうだ。」

「音でもないとしたら……何だ？」

「分からないな……。オレ達の知らない何かで見ているのかもしれない……。」

その時だった。突然全身に鳥肌が立ったオレは視線を親父から階段下の眼に向けた。

「どうした？」

親父の声をどこか遠くに感じながら、オレは冷や汗が止まらなかった。

「……見つけた。」

「なに……？」

「うおおおおお！」

親父が聞き返してくるよりも早く、眼の中心から大量の黒い腕が伸びてきた。オレが摸造刀でたたき落とせたのは、最初の一本だけだった。

「は、離せっ！」

オレは迫り来る多くの黒い腕に腕や足を掴まれた。そしてその腕に掴まれた瞬間、体から力が抜ける感覚がした。何とか逆らおうと踏ん張るも、体はゆっくりとその眼の中心の闇へと引きずられていく。

「修夜！ 真昼っ！」

もはや身動きの取れない体勢で、オレは首だけを動かして後ろを見た。反対側、つまり階段上の眼からも黒い腕が伸びており、徹と真昼が必死に捌いている。

「徹っ！ 杏里がつ。千歳もっ！！」

無数の黒い腕に掴まれながらも、優羽は必死にその場で踏ん張り、そのほとんどが眼の中心の闇に飲まれてしまった白い腕を掴んでいた。千歳か、それとも杏里の腕なのか、もはや判断できない。

「父さん！ 修夜がつ……！」

オレは闇に飲まれ、ゆっくりと狭まる視界に親父の姿を見つけた。親父は真っ直ぐにオレを見つめ、黒い腕を捌きながらこちらに手を

伸ばす。

「修夜っ、手を……！」

怒ったような、泣き出しそうな、そんな不思議な親父の顔を最後に、オレの意識は闇に消えたのだった。

ブログ4誘（いざな）いの目（後書き）

ブログはここまでです。

次回からは更新頻度がガクッと落ちると思います。

気長にお待ちください……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6679t/>

昼と夜と異世界と.....

2011年5月31日19時55分発行